

行政視察報告書

行政視察の結果について、下記のとおり報告します。

令和8年8月10日

光市議会議長 森戸 芳史 様

議員 森戸 芳史

記

- 1 調査年月日 ①令和8年7月14日（火） 13:30～15:00
 ②令和8年7月15日（水） 10:00～12:00
- 2 調査市等 ①静岡県吉田町（人口29,206人、面積20.7k㎡）
 ②神奈川県海老名市（人口141,495、面積26.59k㎡）
 令和5年11月末時点
- 3 調査結果 別紙のとおり

調査結果①

日 時	令和 8 年 7 月 14 日（火）、13：30～15：00	
調 査 市 等	静岡県吉田町	
調 査 事 項	リーディング DX スクール事業について	
説 明 者	教育委員会学校教育課 平井 奉子氏 等	

吉田町の概要

吉田町は、県中部の志太榛原地域に属し、大井川河口西側で駿河湾に面する面積約 20.7 ㎢、静岡県で 2 番目に小さな町。古くから大井川の伏流水を生かした養鰻業や吉田漁港でのしらす漁、レタス栽培などの農漁業が盛んで「うなぎの町」として知られる一方、東名高速道路吉田インターチェンジと国道 150 号を軸とした交通利便性を背景に企業立地が進み、現在は農漁業と製造業が共存する都市近郊型の産業構造へと変化している。

生産年齢人口は県内 2 位で働き盛りの人が多く、1 人当たりの公園面積も県内 6 位と緑にあふれ、人口社会増減率も県内 2 位と多くの転入者を迎え、待機児童ゼロ、津波避難タワー15 基設置、死亡事故ゼロ 1000 日達成と子育て支援や教育、防災などにも力を入れている。

視察目的

光市教育委員会では 2021 年 1 月に市内全小中学生に（約 3345 人）一人 1 台のタブレット端末の貸与・導入を実施。光市と同時期に導入し全国モデル校としてトップを走る吉田町を視察し、成果と課題への対応を探った。

文部科学省リーディング DX スクール事業とは

文部科学省のリーディング DX スクール事業は、「令和の日本型学校教育」の実現に向け、一人一台端末とクラウド環境を活用した授業改善と校務 DX を先導的に進める取組である。全国の小中高等学校等から指定校を選定し、GIGA 端末の標準ソフトとクラウドを日常的に活用することにより、情報活用能力の育成と、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させる授業モデルの創出を目指している。併せて学校経営全体の DX を進め、実践事例の全国展開を図る。

吉田町のリーディング DX 事業の概要

吉田町は、文部科学省のリーディング DX スクール事業の指定を受けた自治体で、町内の 3 小学校と 1 中学校すべてが指定校となっている。GIGA スクール構想で整備された一人一台端末とクラウド環境を「普段使い」することを前提に、授業改善と校務 DX を町ぐるみで一体的に進めている。

DX 事業基本方針

- 児童生徒一人一人に応じた個別最適な学びと、話し合いや共同編集などによる協働的な学びを同時に充実させ、主体的で対話的な深い学びを実現すること。
- 授業や評価、児童生徒の振り返りでデジタルデータを活用し、情報活用能力をカリキュラム全体で育成すること。
- 校務のデジタル化と教員研修を通じて業務を効率化し、子どもと向き合う時間の確保と働き方改革につなげること。

授業・学びの取組

- すべての教科等で端末とクラウドを日常的に活用し、資料配布、課題提出、振り返りをオンラインで行うことで、学習履歴を蓄積しやすくしている。
- クラウド上で児童生徒同士の考えを共有することで、友達の考えを必要なタイミングで参照したり、自分で協働の相手を選んだりする学び方を促している。
- 小学校において、従来の形式にとらわれない「学習の最適化」に焦点を当てた指導案を作成し、一人一人の状況に応じた個別の支援を DX で後押ししている。
- 小学校において、教科ごとのウェブサイトを中心に反転学習や発展学習を行い、家庭学習と授業を連動させた探究的な学びを進めている。
- 中学校において、単元や年間を通した学習設計の中に端末活用を組み込み、協働学習と振り返りを一体で進める授業づくりを行っている。
- 中学校において ICT 活用により、他者の意見の参照や自分の考えの整理がしやすくなり、主体的に学びに関わる環境が整備されている。

教員の働き方改革とやりがいにつながる校務 DX と研修の取組

- 町内すべての教職員がチャットツールでつながり、授業実践やお知らせ、研修情報などを日常的に共有する体制を構築している。
- チャットとクラウドを活用することで、会議時間の短縮や、資料配布・決裁など校務の効率化を図り、人と人との関わりを密にしながら働き方改革にもつなげている。
- 吉田町教育委員会が中心となり、校種を越えた合同研修や公開授業、夏季学習会などを通じて、教員が互いの実践から学ぶ仕組みを整えている。
- 端末操作にとどまらず、カリキュラム・マネジメントの観点から「学習のねらい」と「DX の手段」を結びつける研修内容とし、授業改善と校務 DX の両面を扱っている。

まとめ

- 町内 3 小学校・1 中学校すべてをリーディング DX スクールとして位置づけ、自治体ぐるみで統一的に取り組んでいる点が特徴とされている。
- 子ども、教職員、保護者の三者にとって魅力ある教育環境を目指す「TCP トリビンスプラン」の中核として、ICT 活用と DX を位置づけている。
- 校内の DX にとどまらず、町全体の教職員がチャットで常時つながり、「研修の交流が日常化」している

所感

視察が絶えない先進地であり、端末を起点にアプリやガイドを活用し既存の手法と重ね合わせることで深く自律的な学びが進む。教員にとっては、事務負担が軽減され子どもに向き合う時間が増え、やりがいにもつながっている。IT 関連が苦手な教員でもスムーズに受け入れるよう配慮がなされている。さらに保護者や地域にも情報共有などの面において好循環が生まれている。課題として、行政の中での他部署や一般社会への波及は限定的で、その成果の拡がりが待たれる。その他、ジュニア ICT リーダー育成研修やオンラインも含めた放課後サポート学習、移住検討者に対する吉田町教育移住ツアーの開催など教育を前面に押し出した一点突破全面展開な取り組みが参考になる。

調査結果②

日 時	令和 8 年 7 月 15 日（水）、10：00～12：00	
調 査 市 等	神奈川県海老名市	
調 査 事 項	海老名市立図書館	
説 明 者	教育部学び支援課 永田 祥子氏 等	

海老名市の概要

海老名市は神奈川県ほぼ中央に位置する市で、西は相模川を境に厚木市と接し、鉄道・道路交通の結節点として発展。市域面積は約 26.6 km²で、東西約 6 km、南北約 9 km と南北に細長い形状。人口は約 14 万人規模で推移しており、東京圏への通勤圏として発展し、駅周辺の再開発や商業施設集積により広域から人を集める拠点性も高まっている。市内には鉄道が三社三路線乗り入れる海老名駅を中心に、商業、業務、住宅が混在する都市機能が集積する一方、相模川流域などには農地も残り、都市と農村が近接している。

視察の目的

新設ではなくリニューアルすることで魅力や集客アップにつなげた海老名市立図書館は財政状況が厳しい光市の図書館にも参考になる点が多いため視察を行った。

施設概要

海老名駅から徒歩圏にある中央図書館は、館内に象徴的な吹き抜け空間を持ち、蔵書が立体的に展開した設計が特徴。2015 年 10 月にリニューアルオープンし、朝 9 時～夜 9 時・原則年中無休の運用で、仕事帰りや休日にも使いやすい施設として位置づけられている。

施設の特徴

●中央図書館は、指定管理者による運営のもと、館内に書店・カフェ機能を組み合わせた形が特徴である。読書や調べものに加え、「本を選ぶ・読む・過ごす」を同じ場所で完結しやすい点が、一般的な公共図書館と異なっている点である。

●館内には授乳室が複数フロアに設けられ、おむつ交換台や調乳用温水器も整備されている。また、館内フリーWi-Fi、Web のマイページからの予約・貸出延長など、日常的に使い続けやすい運用面の工夫も特徴的である。

大規模改修の経緯とポイント

●総事業費 約 10 億 7900 万円。

●築約 30 年が経過し、外観は活かしつつ内装を中心に大規模改修する方針が示された。

●改修工事のため、2014 年 11 月末から閉館し、「改修」と「運営体制」の切替を進めた。

●改修後は、指定管理者による運営のもと、2015 年 10 月 1 日にリニューアルオープン。

これまでの図書館との比較

開館日については通常の図書移管運営から、年中無休へ。開館時間は日中中心の運営から朝 9 時から 21 時まで。開架図書も約 12 万冊から約 25 万冊へ増刷。従来型の閲覧中心から円形吹き抜けを核とした滞在型空間へ。機能は閲覧型から図書と書店とカフェの所を楽しむ空間に変わった。

指定管理者制度導入の特徴

2014 年度から、中央図書館と有馬図書館に指定管理者制度を導入し、カルチュア・コンビニエンス・クラブ（CCC）と図書館流通センター（TRC）の共同事業体に運営を委託。

- 指定管理料 年間およそ 4 億から 4 億 7 千万円で推移。（資料費も含む）
- 書店・カフェを併設した「滞在型」の空間デザインと売場づくり
- ICT を活用した予約・返却、駅やコンビニでの返却など利便性向上策
- 民間イベントやプロモーションのノウハウを生かした文化プログラム
- 指定管理者としての人員配置や営業時間設計による長時間開館の実現

所感

CCC の図書館については全国で最初の武雄市立図書館も開館当初視察。当時の樋渡市長が見学した代官山蔦屋も視察。全国で 2 番目に開館した周南市立駅前図書館も視察した。武雄や周南がまちづくりの賑わいとしての色合いが強い施設であるのに対し、海老名市立図書館は様々な世代が純粋に本を楽しめる空間を追求したものとなっている。書物の販売も行われているが市内に書店もないということで民業圧迫にはなっていない。光市立図書館は建設から 50 年余りが過ぎ、老朽化も進み、書の半数は閉架にあり手狭で、ハード面は限界にきている。これまでも建設の方向で検討されたが、西日本豪雨災害などの財政への影響で足踏み状態である。近隣自治体は新図書館を建設し多くの若者は足繫く通っており、おしゃれな空間に惹かれていると考えられる。

光市において新設は無理としても若者流出防止や子育て支援、市民生活の質向上策としてリニューアルと民間ノウハウの活用は検討されるべきだと考える。